

陳與義の南渡

中尾 彌 繼

はじめに

宋代を見る上で重要となる事件は無論いくつもあるが、とりわけ靖康の變は北宋の崩壊から南宋の再興とを餘儀なくされる事件として、決して無視できるものではない。しかしそのことをただ漠然と心に留めておくだけではなく、當時の知識人がどのような視點でこの事件を捉えていたのかについて、詳しく論じているものは少ないように思われる。拙論では、北宋末から南宋初期を生きた文人・陳與義（一〇九〇—一一三九）に注目し、陳與義というフィルタを通じて北宋末から南宋初期という時代を少しでも垣間見、またその時代を生きる陳與義自身の内面にも少しく觸れてみたい。

一

陳與義は政和三年（一一一三）上舍甲科を以て及第し、文林郎を授かった後、開德府教授・辟雍錄などの職を経て、宣和五年（一一二五）徽宗皇帝に「墨梅」詩を認められて秘書省著作佐郎に除せられ、その才能を世に認められ始める。そうした時期、靖康元年（一一二六）北方より金が南下し宋の都を襲う、所謂靖康の變の始まりである。徽宗・欽宗の兩皇帝がさらわれ、都開封は金軍に侵略され、多くの人々が南方へと逃れていく。そして欽宗の弟である高宗が翌年即位し、都を臨安

に定め南宋を再興させることとなる。

陳興義もその混乱の中南方へと逃れ、金軍の宋王朝を脅かす様を實際に體驗した一人である。陳興義の事跡については白敦仁氏『陳興義年譜』（一九八三年、中華書局）が詳しいのでそれによりつつ陳興義の靖康の變の足跡を追うことにする。金軍が都に侵攻しているその頃、彼は陳留（河南省陳留縣）にあり、金軍侵攻の報を聞き、陳留を去り、陳留のはるか南に位置する商水（河南省商水縣西三十里）へと亂を避ける。三十七歳春の頃のことである。その道中における心情を彼は「發商水道中」（『陳興義集校箋』卷十四）に綴っている。後半の四句を引いてみる。

草草檀公策

草草たり 檀公の策

茫茫杜老詩

茫茫たり 杜老の詩

山川馬前闊

山川 馬前に闊く

不敢計歸時

敢えて歸時を計らず

檀公とは『南史』卷四十五王敬則傳で、「敬則曰、『檀公三十六策、走是上計、汝父子唯應急走耳。』蓋譏檀道濟避魏事也。」と言うのに基づき金軍の侵攻に際して慌てて檀公の策を採って逃れ、またいざ杜甫の詩を思い起こそうとしてみて、ぼんやりとしてはつきり思い浮かべることができず、その當時の慌てる様子が見て取れる。杜甫のどのような詩を想起しているのかは具體的にはつきりしないが、安史の亂の時の杜甫と自らの境遇とを重ね合わせているのであろう。また末句の「不敢計歸時」というのも、この北方の地に歸ることがないことを暗示するかのような表現であり、また事實そうなる。

以後陳興義は商水から舞陽（河南省舞陽縣）、南陽（河南省南陽縣）などを経て鄧州（河南省鄧縣）へと南下し逃れていく。鄧州に着いた彼は「雨」（卷十五）^③の末句に、

此身南復北

此身 南し復た北す

髣髴是它郷

髣髴たり 是れ它郷なるに

といい、北に南にと一所に留まらず、自分が他郷にあることを実感している。故郷を離れて寄る邊ない身を憂えている心情を知ることができよう。

『陳興義年譜』によればこの後いったんは陳留に戻りまたすぐ陳留を離れて、汝葉（未詳）・方城（河南省方城縣）を経て光化（湖北省光化縣）から再び鄧州に入ることになる。「道中書事」（卷十六）はその道中に詠まれたものである。

臨老傷行役

老いに臨み行役を傷み

籃輿歲月奔

籃輿 歲月奔る

客愁無處避

客愁 避く處無く

世事不堪論

世事 論ずるに堪えず

白道含秋色

白道 秋色を含み

青山帶雨痕

青山 雨痕を帶ぶ

壞梁斜鬪水

壞梁 斜にして水と鬪い

喬木密藏村

喬木 密にして村を藏す

易破還家夢

破れ易し 家に還るの夢

難招去國魂

招き難し 國を去るの魂

一身從白首

一身 白首に從^{まか}せ

隨意答乾坤

意に隨いて乾坤に答う

「客愁無處避、世事不堪論」といい、故郷を離れた愁いの氣持ちは逃れることはできず、世の中の事も論じるにはあまりに悲惨であるという痛恨の心情が見える。「壞梁斜闘水、喬木密藏村」の句は戦亂のせいであろうか、壞れたまま川の流れのなすがままの橋や村を隠すほどに伸び放題の木々が逃避の道中の侘びしさを感じさせる。また「易破還家夢、難招去國魂」と故郷に歸りたくてもそれは儚い夢であり、『楚辭』の「招魂」を踏まえて屈原のような憂國の士も招きがたいとも述べ、「一身從白首、隨意答乾坤」と年老いるままに任せてあるがままに振る舞おう、というなげやりの氣持ちさえ表し、如何に今の世情に對して意欲を無くしているかが見て取れる。この時彼は都を離れ逃亡の身となつたうえに官僚としての責務も全うできず己の無力さを感じていたのではないだろうか。

再び鄧州に入る頃には年も變わり建炎元年（一一二七）となる。この時期は詩作數もあまり多くないが、それでも南下を續ける陳與義には憂いの氣持ちが消えることはない。「重陽」（卷十七）の冒頭の二句には、

去歲重陽已百憂

去歲 重陽已に百憂

今年依舊歎羈遊

今年 舊に依りて羈遊を歎く

というが、前年靖康元年頃の詩作の中で重陽を詠む詩は無く、菊花を賞する内容の詩も今は残っていない。昨年の重陽の頃にはすでに多くの憂いを抱き、今年もやはり他郷にいる身を歎いており、長く続く苦惱は重いストレスとなっていただろうと推測させられる。また末句では、

如許行年那可記

許の如き行年 那ぞ記す可けん

謾排詩句寫新愁

いたす 謾に詩句を排べて新愁を寫す

とも述べ、これまで生きてきた年月をどうして書き留めておくことができるだろうかと言っては空しく詩句を並べて新たな憂いを記すという。「如許行年」というものの、心に抱く中心は金軍の侵攻によって都を追われ逃亡する間の不遇であろう、詩句を並べても愁いを残し留めるだけであり、詩人の苦惱が讀み取れ、この戦亂に對する愁いの程が如何に大きいものであつたかが分かる。

建炎二年に至り、鄧州から房州（湖北省房縣）へとさらに南に下る。そこに金の軍勢が房州に攻め入り、緊迫した状況となる。「正月十二日自房州城遇虜至奔入南山十五日抵回谷張家」（正月十二日 房州城より虜の至るに遇い奔りて南山に入り十五日回谷の張家に抵る）（卷十七）は比較的長い詩であるが、亂を逃れて一時的に落ち着く様子を述べており注目される。

久謂事當爾

久しく謂う 事當に爾るべし

豈意身及之

豈に意わん 身の之に及ぶを

避虜連三年

虜を避けて連なること三年

行半天四維
我非洛豪士
不畏窮谷飢
但恨平生意
輕了少陵詩
今年奔房州
鐵馬背後馳
造物亦惡劇
脫命眞毫釐
南山四程雲
布襪傲險巇
籬閒老炙背
無意管安危
知我是朝士
亦復顰其眉
呼酒軟客脚
菜本濯玉肌
窮途士易德
歡喜不復辭
向來貪讀書

行きて天の四維に半ばなり
我れ洛の豪士に非ず
窮谷の飢を畏れず
但だ恨む 平生の意
少陵の詩を輕んじ^{おも}了れるを
今年 房州に奔り
鐵馬 背後に馳す
造物 亦た惡劇たりて
命を脱するは眞に毫釐
南山 四程の雲
布襪 險巇に傲る
籬閒 老たるの背を炙りて
安危に管する意無し
我れ是れ朝士たるを知りて
亦た復た其の眉を顰む
酒を呼びて客の脚を軟らげ
菜本 玉肌を濯う
窮途に士は徳なり易く
歡喜して復た辭せず
向來 讀書を貪りて

閉戸生白髭

戸を閉め白髭を生ず

豈知九州内

豈に知らん 九州の内

有山如此奇

山有りて此の如く奇なるを

自寛實不情

自ら寛^{ゆる}うするは實に情ならず

老人亦解頤

老人 亦た頤を解く

投宿恍世外

宿に投ずれば世外に恍たり

青燈耿茅茨

青燈 茅茨に耿たり

夜半不能眠

夜半 眠る能わす

澗水鳴聲悲

澗水 鳴聲悲し

「南山」や「回谷」といった地名は特定できないが房州の町から金軍を逃れていく道中に立ち寄った場所であり、回谷の張某の家に宿を取った詩である。初めの四句で思いもよらず長きにわたり金軍を逃れて非常に遠くまできていることを述べ始めるが、五六句目では唐の康駢の『劇談錄』卷下に、

「乾符中、洛中有豪貴子弟、承藉薰蔭、物用優足、恣陳錦衣玉食、不以充拙爲戒飲饌華鮮、極口腹之欲。……（中略）……復曰、『（聖剛）上人未知凡以炭炊飯、先燒令熟、謂之煉火、方可入爨、不然猶有煙氣。』……（中略）……。及大寇先陷瀘洛、財產剽掠俱盡、昆仲數人、與聖剛同時竄避潛伏山草、不食者三日。賊烽稍遠、徒步將往河橋道中小店始開、以脫粟飯爲餐而賣。僧囊中有錢數文、買於土坏同食。腹枵既甚、美於梁肉不如。僧笑而謂曰、『此非煉炭所炊。不知可與諸郎君喫

否。』但低首慚覲無復詞對。」

（「乾符中、洛中に豪貴の子弟有り、承藉薰蔭し、物用優足す、恣陳錦衣玉食、充飫するを以て飲饌華鮮を戒めるを爲さず、口腹の欲を極む。……（中略）……復た曰く、『（聖剛）上人は未だ凡そ炭を以て飯を炊くを知らず、先ず焼きて熟せしむ、之を煉火と謂い、方に爨に入れんとす可し、然らざれば猶お煙氣有り。』と。……（中略）……。大寇の先ず邕洛を陷とし、財産剽掠され俱に盡きるに及び、昆仲數人、聖剛と時を同じうして竄避し山草に潛伏し、食べざる者三日。賊烽稍や遠のき、徒步して將に河橋に往かんとし道中の小店始めて開き、脱粟飯を以て餐と爲して賣る。僧の囊中に錢數文有り、土坏を買うて同に食す。腹枵えて既に甚し、梁肉より美たりて如かず。僧笑いて謂いて曰く、『此れ炭を煉りて炊く所に非ず。諸郎君と喫するか否かを知らず。』と。但だ首を低くし慚覲して復た詞對する無し。」）③

とあるのを踏まえて自分は洛の豪士ではないので飢えは恐れはしないというが、「但恨平生意、輕了少陵詩」と平素から杜甫の詩によく親しみ理解を深めてこなかった事を後悔している。勿論それは謙遜であり、實際にはよく學んでいたに違いないのであろうが、この時期それだけ杜甫の詩を心の據り所としていたと考えていたと言えよう。先の「發商水道中」詩でも杜甫の詩を意識していたがここに至ってもその氣持ちは抱き續けており、やはり安史の亂やそれ以後の困難を述べた詩を想起していただろう。「造物亦惡劇、脫命眞毫釐」と天意に翻弄され命からがら逃れてきたところまでは金軍の侵攻を逃れてきた旅程が非常に困難なものであったことを示しているが、詩の後半では張氏のもてなしを受け、「呼酒軟客脚」以後四句では歡待され窮地に恩恵を受けることができ、旅の疲れを癒されひとまずは落ち着きを得たことを感じさせ、また「向來貪讀書」以後四句がいうよう

に讀書にふけるばかりでいたが世の中にこのような素晴らしい山のあることに氣づくことができたことも、この地でささやかな平穩を得られたことを思わせる。ただ末句で「夜半不能眠、澗水鳴聲悲」と谷川の悲しく流れる音に安眠を得られないことは、ひとたび安堵を得ても心中にはいまだ治まらない戦亂への不安を拭うことのできない心情の吐露が伺える。

この年の夏頃から、陳興義は房州から均陽（湖北省均縣）へと更に船に乗り南へと逃れていく。「舟次高舍書事」（卷十九）^③の末四句では、

亂後江山元歷歷

亂後の江山 元より歷歷

世間岐路極茫茫

世間の岐路 極めて茫茫

遙指長沙非謫去

遙かに長沙を指すは謫去するに非ざるも

古今出處兩淒涼

古今の出づるも處るも兩つながら淒涼たり

と述べ、戦亂を迎えた後もはつきりとそこに存在している江山の風景とは對照的に世の分かれ道、ひいては自身の進むべきはどこに向かうのか全くはつきりしておらず、迷いの心情が表れている。さらに「遙指長沙非謫去、古今出處兩淒涼」とは賈誼が長沙に左遷されたことに基づく表現であるが、陳興義自身は左遷されてこの地に來たわけではない。理由は異なるも兩者ともに故あつて同じ所に向かうのだが、どちらも惨めなことである、とやはり自嘲しているのである。

二

湖北湖南の地まで逃れてきた陳興義は建炎三年（一一二九）をこの地で迎える。これまでは金と

いう外敵の侵略を恐れて南下するという圖式であつたが、ここに至つていささか異なる事情も出てくるのである。

五月二日避貴寇入洞庭湖絶句

(五月二日 貴寇を避け洞庭湖に入る絶句) (卷二十一)

鼓發嘉魚千面雷

鼓は嘉魚に發し 千面の雷

亂帆和雨向湖開

亂帆 雨と和ともに湖に向いて開く

何妨南北東西客

何ぞ妨げん 南北東西の客

一聽湘妃瑤瑟來

一たび湘妃の瑤瑟の來たるを聽くを

題に言う「貴寇」というのは、建炎三年春、軍を率いて岳州を陥れた貴仲正の事をいう。詩にいう嘉魚は鄂州(今の湖南省武漢市)から大江を遡り岳州(湖南省岳陽市)へと續くそのほぼ中間に位置する一縣である。大江は岳州を経た後洞庭湖へと注ぐ。陳與義は貴仲正の亂を避けて嘉魚から大江を上つて洞庭湖に入つたようである。

ところで貴仲正について、歴史書ではほとんど觸れられていない。『宋史』卷二十五本紀第二十
五 高宗二(三)には、

(建炎)三年春正月庚辰朔、帝在揚州。以京西北路兵馬鈐轄翟興爲河南尹、京西北路安撫制置兼招討使。京西賊貴仲正陷岳州。……(中略)……是夏、賊貴仲正降。

（建炎）三年春正月庚辰朔，帝揚州に在り。京西北路兵馬鈐轄の翟興を以て河南尹、京西北路安撫制置兼招討使と爲す。京西の賊の貴仲正岳州を陥す。おと……（中略）……是の夏，賊の貴仲正降る。）

と貴仲正が舉兵し岳州を脅かし、その後平定されたところまでは追うことができる。また『建炎以來繫年要錄』卷十九⑥にも

「建炎三年春正月庚辰朔、上在揚州。是日、賊貴仲正引兵犯岳州。」

（建炎三年春正月庚辰朔、上揚州に在り。是の日、賊の貴仲正兵を引きて岳州を犯す。）

といい同卷二十四には、

「是夏、賊貴仲正破岳州、詔遣兵討捕。」

（是の夏、賊の貴仲正岳州を破り、詔して兵を遣わして討捕せしむ。）

と述べているが、『宋史』と大同小異の記述である。またその他の主だった史書、『三朝北盟會編』『中興小紀』『續宋中興編年資治通鑑』などには貴仲正に關する記事は見受けられないが、陳與義はこの内亂に際して幾篇かの詩を残しており、むしろ史書の缺を補い得るとともに、その頃の事情を少しく理解することができる。「過君山不獲登覽」（卷二十一）には、

今朝過山下
賊急不敢留

今朝 山下を過ぎるも
賊急にして敢えて留まらず

とその逃避行が差し迫ったものであることを表しているが、しばらくは以後の詩にも同様の切迫感が表れている。

細雨（卷二十一）

避寇煩三老	寇を避くるに三老を煩わし
那知是勝遊	那ぞ知らん 是れ勝遊
平湖受細雨	平湖 細雨を受け
遠岸送輕舟	遠岸 輕舟を送る
天地悲深阻	天地 深阻を悲しみ
山川慰久留	山川 久留を慰む
參差發隣舫	參差として隣舫發し
未覺壯心休	未だ壯心の休むを覺えず

三句目に「平湖」というのを見るに、なお洞庭湖にあつての作であろう。急ぎ慌て貴仲正の軍から逃れようとしているさまを、如何に美しい景勝があるにも關わらずそれを知ることできないほどであると例え、「天地悲深阻、山川慰久留」といっては自身苦しく険しい逃避行をしそれで長い

聞この地に留まらなければならぬことを、天や地、山川の風景に託して悲しんでもらい慰めてほしいという悲痛の念を感じさせる。しかし末句に「未覺壯心休」と、戦亂に直面しつつもまだ勇壯の氣持ちの衰えていない事も述べるところに、詩人の膽力が伺える。「泊宋田遇厲風作」（宋田に泊り厲風に遇うの作）（卷二十一）①もやはり洞庭湖における作で、宋田港については具體的な場所とは明らかではないが、洞庭湖にある一港であろう。始めの二句では、

逐隊避狂寇

隊を逐て狂寇を避ければ

湖中可盤嬉

湖中 盤嬉す可けんや

と湖中に留まつて樂しむ餘裕などないほどに切迫した狀況を詠じ、末二句でも

蕭蕭不自暢

蕭蕭として自ら暢びず

耿耿獨題詩

耿耿として獨り詩を題す

と心を安んじて詩を読むほどには至らないと述べ、晴れぬ氣持ちが見て取れる。そうした内に、事態は終息へ向かう。「二十二日自北沙移舟作是日聞賊革面」（二十二日 北沙より舟を移すの作是日賊の革面するを聞く）（卷二十一）②詩によつて、貴仲正の内亂が平定されたことが知れる。北沙も明らかではないが洞庭湖の中の場所と思われる。その中で陳與義は、

豈知虎與狼

豈に知らん 虎と狼

義感功反集

義感して 功反つて集まるを

と述べるのは、杜甫の「三絶句」の第一首にある「群盜相隨劇虎狼、食人更肯留妻子」と『隋書』孝義・郭儁傳に「家門雍睦、七葉共居、犬豕同乳、烏鵲通巢、時人以爲義感之應」とあることを踏まえ、虎や狼までが義感に應じて仲睦まじく集うことがあるなどということは知りもしなかったと述べ、貴仲正の内亂の平定に如何に安堵の感があつたかが伺える。また末句では、

聊以憂世心

聊か世を憂うの心を以て

寄茲忘快悵

茲に寄せて快悵を忘れん

というように、その安堵感から世を憂える氣持ちに寄せてしばし不平を忘れようという所にも垣間見える。

貴仲正の内亂は、歴史書には多く語られないことであるが、金軍を逃れて亂を避けて南下してきた陳與義にとって、靖康の變の大きな流れはある意味漠然としたものであり、こうした避難した先での騒亂の方こそ、實感できる世の混亂ではなかっただろうか。

三

建炎四年（一一三〇）、更に西に向かつて邵陽（湖南省邵陽市）を経て、そこから南下して永州（湖南省零陵縣）に至る頃には、高宗の治世も少しずつ回復の兆しを見せ始め、招聘の命を受ける者も出てくる。

三月二十日聞德音、寄李德升席大光、新有召命、皆寓永州

(三月二十日德音を聞き、李德升席大光に寄す、新たに召命有り、皆永州に寓す) (卷二十五)

塵隔斗牛三月餘

塵は斗牛を隔て三月餘

德音再與萬方初

德音再び與う 萬方の初め

又蒙天地寬今歲

又た蒙る 天地の今歲より寬きを

且掃軒窗讀我書

且く軒窗を掃きて我が書を讀まん

自古安危關政事

古より安危は政事に關わり

隨時憂喜到樵漁

時に隨いて憂喜は樵漁に到る

零陵併起扶顛手

零陵 併び起つ 顛を扶くるの手

九廟無歸計莫踈

九廟 歸る無く 計踈んずること莫れ

題にある「三月二十日聞德音」とは、『宋史』高宗紀に「建炎四年二月丙申、以金兵退、肆赦」

とあることから、天子高宗の恩赦の報が少しく遅れて届いたのであろう。二句目にいう「德音再與萬方初」もそのことを踏まえている。李德升は李擢、席大光は席益のこと、特に席益は陳與義とは北宋時代からの知人であり、後に宰相にも上る人物である。李擢と席益には新たに招聘の命があり、一同は永州に集ったのである。「零陵併起扶顛手、九廟無歸計莫踈」というのは、この永州の地で世の危機を助ける者が並び立つておるのだから、天子の宗廟は金に侵され戻らぬとはいえ、王

朝回復の計を疎かにしないよう、との彼らなりの決意であろう。これまで長い逃避行を續けてきた陳興義にとつても、この恩赦により少なからず希望を見いだしたと言えるのではないだろうか。

紹興元年（一一三一）夏に至り、陳興義自身も臨安の行在所に赴き、そこで兵部員外郎の職を得る。また八月には起居郎に任じられ、これまでの南渡の苦しい日々が報われたかのように、中央の政治に参加していくようになる。ただ、いくら彼が政治に参畫できるようになったからとはいえ、世の亂れが全て治まったわけではなく、折に觸れ世情を憂える詩を残している。「雨中」（卷二十九）は紹興元年の年の暮れの作とされ、その前半に、

北客霜侵鬢

北客 霜 鬢を侵し

南州雨送年

南州 雨 年を送る

未聞兵革定

未だ兵革の定まるを聞かず

從使歲時遷

歲時をして遷らしむるに從すまか

と述べており、「北客」という語には、南方にあつても自らは北の地の人間であるという意識があることを感じさせ、今なお平定されない兵軍があり、時の移り變わりに任せるだけであると、いささかなげやりの心情をも見せる。如何に彼が官僚として復歸し政治に攜わろうとも、一度失墜した王朝の再興は決して容易なことではなく、戦亂の傷跡は詩人の心にも暗い影を残したといえよう。

おわりに

靖康の變から以後の陳興義の世情を憂える詩を見てきた。この戦亂の時期における人々の苦難や

憂國の情は、これは當時そこに生きていた全ての人たちが持ち得たことであるだろうが、彼においては、徽宗皇帝に認められて中央への道が開けたところであっただけに、青天の霹靂の如き金軍の侵攻であつたであろう。南へ逃れる過程において幾度となく北宋の滅亡を予見し、天下の騷亂を憂い、自らの不遇を愁いたが、これは南渡を通じて常に陳興義の心の奥に消えることなく存在する感情であつた。

一方、南に逃れることで、直接的に金軍の侵攻に身をさらすことがおそらくなかつたであろう陳興義にとつて、實際的な兵亂は、むしろ貴仲正などの反亂による内紛であつた。史實には記載される事が非常に少ないこの出来事は、靖康の變に端を發する一連の騷亂からすればさほど取るに足りない事變であつたかもしれないが、陳興義にとつては確かに遭遇した戰亂であり、この時期の詩には状況の切迫した表現がよく見られ、内亂の平定は彼にひとときの安堵感をもたらした。

その後高宗によつて政界に復歸し王朝再建に盡力することになるが、戰亂の時期の暗い影が心のどこかに存在しており、おそらく以後も消えることはなかつたであろう。

こうした境遇とそれによりもたらされる心の傷は、なにも陳興義一人ではなく、この時代に生きた人々それぞれが持っていたに違いない。本論ではあくまで陳興義という個人を通じて探ったのみであるが、こうした研究の積み重ねによつて宋王朝の歴史を、殊に北宋から南宋へ移行する過程を紐解くことが、より容易となるであろう。

（注）

（1）陳興義の詩の引用は『陳興義集校箋』（一九九〇年、上海古籍出版社）による。また詩の製作年は白

敦仁氏『陳興義年譜』（一九八三年、中華書局）による。

(2) 「重陽」の全文を引いておく。

去歲重陽已百憂、今年依舊歎羈遊。籬底菊花唯解笑、鏡中頭髮不禁秋。涼風又落宮南木、老鴈孤鳴漢北州。如許行年那可記、謾排詩句寫新愁。

(3) 清・張海鵬輯『學津討源』文學類・瑣談（一九九〇年、江蘇廣陵古籍刻印社）による。

(4) 宋・王存等奉敕撰『元豐九域志』（一九八四年、中華書局）卷一四京・京西路・南路・襄州に「望、鄧城。州北二十里。八鄉。牛首、樊城、高舍三鎮。有浣河、泌白水。」とあり、おそらくこの地であろう。

(5) 一九七七年、中華書局。

(6) 一九八三年、中文出版社。

(7) 「泊宋田遇厲風作」の全文を引いておく。

泊舟宋田港、俯仰看雲移。造物猶不借、顛風忽橫吹。洞庭何其大、浪挾雷車馳。可憐岸上竹、翻倒不自持。老夫元耐事、淹速本無期。會有天風定、見汝亭亭時。五月念貂裘、竟生薄暮悲。蕭蕭不自暢、耿耿獨題詩。

(8) 「二十二日自北沙移舟作是日聞賊革面」の全文を引いておく。

宛宛轉湖灘、遙遙隔城邑。是時雨初霽、衆綠帶餘濕。曉澤澹不波、菰浦覺風入。我生莽未定、世故紛相襲。覲然賀蘭面、安視一坐泣。豈知虎與狼、義感功反集。堯俗可盡封、嗚呼吾何及。氣蘇巨浸內、未恨乏供給。日曆會有窮、吾行豈須急。近樹背人去、遠樹久凝立。聊以憂世心、寄茲忘快悵。